

# スピノザの実体論

—— 目的論的幻想の彼方へ ——

柴 田 健 志

## 1

スピノザは『エチカ』第一部の付録で「私の論証の理解を妨げるような諸偏見」に言及し、それらの諸偏見があるひとつの偏見に由来するといっている。すべての偏見の根源であるとスピノザがいうひとつの偏見とは「目的論」である。

人々は一般にすべての自然物が自分たちと同じように目的のためにはたらいっていると想定しており、さらに神自身がすべてを何らかの目的に向かって導いているということを確認なものと信じている。というのも彼らは、神はすべてのものを人間のために創り、また神を尊敬させるために人間を創ったといっているからである。

スピノザは人々が容易にこうした偏見を抱く理由は次の二点を前提するだけで説明できるという。すなわち、①人間はものの原因を知らないこと。②人間は自己に有用なものを求める衝動をもち、それを意識していること。これだけのことを前提すれば、第一に人間は自分を自由であると信じるということが帰結するという。なぜなら人間は自分の衝動は意識できるがその衝動そのものの原因を知らないからである。そして第二に人間はすべてを自分が欲求するもののためにおこなうということが帰結するという。なぜなら人間は自己の衝動ないし欲求以外に自己の行為を動機づけるものを知らないからである。このゆえに人間はまったく自由つまりは外部から強制されることなく、自己の利益となるものを判断しそれを追求することになるだろう。すると人間は自然のなかに

自己の欲求を満たすことのできる極めて多くのものを発見するはずである。だが、なぜこれほどまでに人間の欲求に適ったものが自然のなかに存在するのか。それらは人間が作り出したものではない。ならば、それは自然を超越した創造者の業に違いない。こうしてすべてを人間のために配置した神の存在がごく自然に考えられるだろう。ではなぜ神は人間を自然のなかに置いたのだろうか。いうまでもなく、自然の諸事物の精密な配置と連関に驚き、その卓越した業を賞賛することのできる知的存在者が必要だったから、つまりは神が自己自身を賞賛させるために人間は創られたのだ。これで冒頭に引用した目的論的世界観ができあがる。

ではこの目的論的世界観から派生するとスピノザが考える「諸偏見」とは何か。価値である。善、秩序、美、人間はこれらが自然のなかに実在すると信じる。なぜなら自然は人間の欲求を満たすように創られたと信じるからである。もちろんスピノザによればこうした概念はたんに人間の表象作用に相対的なものにすぎず、自然のなかに実在しはしない。その証拠に、我々は自然のなかに善、秩序、美とともに悪、混乱、醜を見出す。もし神が人間の欲求に合わせて最高度の技術を用いたとすれば、こうしたものが自然のなかに存在することは不条理以外の何ものでもありません。

## 2

『エチカ』の理解を妨げる諸偏見、その根源にある目的論的世界観が神学的幻想として批判されていることは以上で明かであろう。それなら神学的幻想とは無縁の我々にとって、『エチカ』の論証を理解することは比較的容易なことなのだろうか。おそらく事態はそう単純ではない。我々は確かに、善／悪、秩序／混乱、美／醜といったものが人間の表象作用に相対的なものであるという点を認識できる。しかも自然が人間のために創られたなどと信じてはいないし、まして神の存在を信じてもない。にもかかわらず、スピノザが神学的幻想として批判する目的論的な考えから決して自由ではない。神学的幻想の生成を説明するためにスピノザがあげた二つの条件は次のようなものであった。①人間

はものの原因を知らないこと。②人間は自己に有用なものを求める衝動をもち、それを意識していること。この二点に対しては我々もさしたる異論はあるまい。ここから人間は自分を自由であると信じるようになるのだとスピノザはいう。さらに人間はすべてを自分の欲求のためにおこなうようになるのだと。自由であるというのは、自然のなかに人間の衝動の原因となるようなものがなく、人間は自然の因果関係を超越した存在であるということの意味する。したがって人間の活動の動因はまさに自然を超越した存在たる人間の欲求のなかにしかないことになる。スピノザはここから目的論という偏見が生じるのだといっているが、スピノザが十七世紀の文脈で神学的幻想として述べた目的論的世界観は、けっして十七世紀という歴史的な文脈に還元されはしない。実際、自然が人間の存在にとっていかに都合よく仕組まれているかに対して我々は驚嘆の念を感じる。しかもその自然のなかに自然そのものの構造を認識することのできる知的存在者が存在することに対して不思議の感にうたれる。こうした感情のなかには間違いなく目的論的世界観が胚胎している。つまりそれは我々と無関係のものではないのである。それどころか、現代の宇宙論がもたらした成果はむしろこうした感情をさらに強烈なものにしているように思われる。ビッグバン理論によって明らかにされたことは、人間という知的生命体が生息するこの宇宙が、奇跡的ともいえる小さな確率で生成したという事実であり、もしこの宇宙を支配する物理定数のひとつでも微妙に異なったものであったとしたら、もはや知的生命体が存在する余地はなかったという事実である。この事実を前にして宇宙の構造と人間の存在のあいだに何らかの目的論的な連関を見出そうとしないことの方が困難である。しかもその知的生命体がいまや宇宙の歴史と構造を解き明かしつつある。これが驚きでなくて何であろうか。しかしそれなら我々もまた目的論という「偏見」のなかにいるといわねばなるまい。

しかし、これは本当に「偏見」なのだろうか。スピノザの説明によれば、目的論というこの偏見は、上の①②の条件からでてくるある信念にもとづいている。すなわち人間は自分が自然の因果関係を超越した存在者であり、かつそのような自覚のもとに自己の欲求にしたがって自然にはたらきかけるという信念

である。「自然の主人にして所有者」<sup>(1)</sup> というデカルトのあまりにも有名な宣言はこの信念を的確に要約したものと考えてよからうが、こうした信念の核心には、自然を認識する人間の知性が自然とは独立の存在者であるという信念があることは明かである。それなら、目的論を「偏見」と断じうる根拠はこの偏見をもたらしている人間知性の独立性をも偏見とみなすこと以外にないことになる。まさにスピノザは『エチカ』第一部でこれを偏見としうるような存在論を論証するのだが、その証明を受け入れることは容易なことではない。神の世界創造など信じない我々にとっても、人間知性の独立性はまったく自明のことだからである。この意味で『エチカ』の存在論は我々にとっても問題であり続けている。こうした観点から、『エチカ』第一部の論証を再考してみなければならぬ。

### 3

我々はある物体がその外部にある他の物体から作用を受けること、またその作用によって運動および静止に決定されること、こうしたことは容易に認めうる。しかしそれと同じ仕方である観念がその外部にある他の観念から作用を受け、その作用によって一定の思惟様態をとるよう決定されているといわれたらどうだろうか。誰かの心のなかで観念どうしが作用し合うというのではない。誰かの心の外部からその心を構成する諸観念に対して観念が作用するというのである。ほとんどのひとには受け入れがたい主張であろう。なぜなら我々は自分の心の外にあるのは物的世界であり、そこには観念など存在しないという信念をもっているからである。我々の信念によれば、観念はつねに誰かの心のなかにある。そして観念が心の外にある他の観念と作用し合うようなことはありえない。しかも我々の心のなかの諸観念のはたらきは物的世界の因果関係からは独立している。我々が上で人間知性の独立性と呼んだ信念の具体的な内容はこうしたものであり、それが否定した主張はスピノザが『エチカ』で述べているものである。スピノザは自然が物的であると同時に知性的でもあり、この二つの属性が同一実体を構成しているがゆえに同一の「秩序と連鎖」にし

たがうと考えた。個々の人間の心は知性（思惟）という属性のもとでみられた実体の様態であり、物体が他の物体によって決定されるのと同じように他の観念によって決定される。このような存在論によってスピノザは人間知性の独立性を「偏見」とみなすような視点をもちえたのである。

スピノザの主張が我々の信念にとっていかに受け入れがたいものであるかはすでに十分明かであろう。問題はこうした主張を導き出すスピノザの論証である。いま問題となる部分を『エチカ』から抽出すると、それは三つの段階にまとめることができる。①スピノザはあらゆる属性が相互に実在的に区別されつつ唯一の実体を構成することを一般的に論証した上で（第一部定理一から十一）、②「思惟」（ないし知性）と「延長」（ないし物体）を実体の属性として認め（第二部定理一、二）、③これらが同一実体を構成するものであるがゆえに、それらの様態たる観念と物体は同一の「秩序と連鎖」にしたがう（第二部定理七）ということを証明している。この三つの段階のなかで最も重要なのは①であろう。なぜならこの論証を認めれば、解釈者たちから「心身平行論」と呼ばれる②③の点は認めざるをえないことになるからである。そしてこの点を認めるということは、個々の人間の心がその外部の他の観念によって一定の思惟様態に決定されているということを認めることにほかならない。つまり人間知性は物的自然から作用を受け決定されることはないが、物的自然と同様の秩序のもとにある知性的自然のなかで作用を受け決定されているということを、それがいかに我々の信念に反したことでありと認めなければならないのである。そこで以下では『エチカ』第一部定理一から十一までの論証を検討してみなければならない。

#### 4

『エチカ』第一部定理一から十一までの論証が神の存在証明であるという点をあらかじめ確認しておくべきであろう。『エチカ』第一部定義六によれば、神とは「絶対に無限な存在者、すなわちその各々が永遠かつ無限の本質を表現する無限の属性から成る実体」である。定理十一はこのように定義された神が

現実存在することの証明になっており、その証明に到るまでの合計十個の定理では、もっぱら「属性」が議論されている。その議論の意味ををここでの確に理解するために注目すべきことは、この一連の議論が「区別 (distinctio)」という概念を軸に展開されているという点である。「区別」にはいくつかの種類があるが、まず第一に「実体」と「様態」の区別がある。定義三によれば実体とは「それ自身のうちにありかつそれ自身によって概念されるもの、すなわちその概念が形成されるために他のものの概念を必要としないもの」である。次に定理五によれば様態とは「実体の変様 (affectio)、すなわち他のもののうちにありかつこの他のものによって概念されるもの」である。つまり、それ自身で存在しうるものとして実体があり、それ以外のものすなわち外部の原因によって決定されるものはこの実体のなかに生じる様態であるというのである。こうした存在論的な区別にもとづいて、スピノザは定理四でいまひとつの区別を導入する。「異なる二つあるいは多数のものは、実体の属性の相違によってか、あるいはその変様〔様態〕の相違によってたがいに区別される」。スピノザはここで複数の存在者が区別される基準が二つあるといている。ひとつは属性による区別であり、いまひとつが同一属性のなかでの様態どうしの区別である。問題は、この二つの区別の仕方が何を意味するかである。

この点を明確にするには次の定理五をみればよい。「自然のなかには、同一本性もしくは同一属性の二つあるいは多数の実体は与えられえない」。スピノザはここである属性によって概念される実体はひとつだけであるといっているのだが、その理由は定理四からすでに明瞭である。というのは、もし同一属性のもとで二つあるいは多数のものが概念されるとすれば、それらのものはすべてその同一属性の変様ないし様態であることになるが、いうまでもなくこれは実体の定義に反しているからである。ここから、属性による区別が数的区別ではないという点を指摘しうる。数的区別が成り立つのは同一属性の実体のなかでの様態どうしの区別においてである。例えば、スイカとメロンが数的に区別され、合計二つと計算されうるのは、それらが「果物」という同一の種のなかで考えられたときである。これに対して、異なった属性を数的に区別しうる同

一の種は考えられえないからである。このように、この二つの区別の仕方は、数的に把握しうるものと把握しえないものの区別に対応していると解釈してよい。

さて、異なった属性によって概念される実体どうしはたがいに作用をおよぼすことはない。換言すればある実体が他の実体の原因となることはない（定理六）。なぜなら異なった属性によって概念される以上、それらの実体には共通するものは何もなく（定理二）、共通のものがないという以上、一方が他方の原因となることはできない（定理三）からである。さらに、外部に原因が考えられないがゆえに、実体は自己原因でなければならないことになる。「実体の本性には現実存在することが属する」（定理七）。同様に、外部が考えられないがゆえに、それはまた無限でなければならないことになる。「すべての実体は必然的に無限である」（定理八）。

ここで注意しなければならない。このように異なった属性によって概念される実体は、たがいに数的に区別されないのだった。したがって異なった属性によって概念される実体を多数の実体と呼ぶことはできない。それらはただ異なった属性によってその都度に概念されるほかなく、したがって異なった属性の実体を同時に概念することなど不可能である。もしできたとすれば、そのとき我々が概念しているものは実体ではなく何らかの抽象的なイメージであるといわねばならない。

ところで、我々がこれまでスピノザの用語にしたがって属性による区別と呼んできたものは、ストアレスをとおしてデカルトに受け継がれていった「実在的区別」というスコラ的概念にほかならない。デカルトの考えでは「一方を他方なしに明晰判明に理解するだけで」二つの実体は実在的に区別できる<sup>(2)</sup>。換言すれば、その概念を形成するのに他の概念を必要とせず、かえって他の概念を排除して明晰判明に理解しうるとき実在的区別が成り立つのである。デカルトの心身二元論の定式化はこの概念によって可能となったものである。「わたしは、わたしが明晰判明に理解するものはすべて、わたしの理解するとおりに神によってつくられうるということを知っているのだから、ある事物が他の事

